

I 導入部

おはようございます。2026年の3月22日の日曜礼拝です。レント、受難節の第五週目を迎えました。今日も愛する皆さんと共に、私たちの救い主であるイエス様に礼拝をささげることができますことを感謝致します。WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）日本は2年連続の優勝を目指しましたが、準々決勝でベネズエラに敗退しました。日本中がショック、がっかりしたのでしょうか。そのベネズエラが決勝でアメリカに勝利して優勝しました。日本がベネズエラに勝っていたら、優勝の可能性もあったことでしょうか。しかし、現実には負けたのです。スポーツの世界では、勝つか負けるかで勝負が決まりません。勝ったら喜び、負けたら落ち込むという大変なことです。また、私たちの人生においても、勝ち負けがつきものなのではないでしょうか。勝ち組と負け組とすみわけをします。そして、勝ち組は胸を張り、良い暮らしを送り、負け組は、下を向いて、厳しい生活を送るとなるのでしょうか。私たちに与えられた人生に、勝ち負けをつけることはおかしいことであり、神様のお心ではありません。十字架刑で悲惨な死をとげられたイエス様は負け組なのではないでしょうか。復活を通して勝ち組となったのでしょうか。人生においても、人間的に見て勝つ時も、負ける時もあるのです。今日は、ルカによる福音書22章26節から43節を通して、「十字架刑を取り巻く人々」と題してお話し致します。

II 本論部

一、なんで俺が十字架を負うのか、から十字架を負えてよかったとなる

26節を見ると、「人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキネレ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。」とあります。キネレ人シモンは、たまたま近くに居合わせたただけでした。そして、負いたくもない十字架を背負わされたのです。この無理やり十字架を背負わされたシモンの姿に、ルカはイエス様に従うキリスト者、クリスチャンの姿を見ているように思うのです。ルカによる福音書9章23節には、「それから、イエスは皆に言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」というイエス様の言葉があります。リビングバイブルには、「いいですか。わたしについて来たい人はだれでも、自分のつごうや利益を考えてはいけません。日々自分の十字架を背負い、わたしのすぐあとについて来なさい。」とあります。自分の都合や利益を捨てさせられて、別に負いたくもない自分に与えられた十字架を背負って、イエス様の後に従う人がキリスト者、クリスチャンであり、そういう人がイエス様に従う人だと示しているように思うのです。私たちキリスト者、クリスチャンも、ある意味では自分の様々な思いを捨てさせられて、別に負いたくもない十字架を背負わされた者と言えるのかも知れません。最初から志を持って、十字架を背負って、イエス様に従おうと決心して教会に来たという人はおそらくいないのでしょうか。自分が自ら意志を持ってではないけれども、いろいろな苦しみや悲しみ、痛み、絶望を経験して何らかの重荷を負わされて、そこから教会に足を運んだ。教会の扉

をたたいて、礼拝や集会に集い、聖書の言葉、メッセージを通して、神様の愛、イエス様の十字架の愛に、福音に触れて救いを経験したのです。シモン自身は、イエス様が苦しうだから、大変そうだから自ら十字架を背負ったのではありません。ただそばにいていやいや、「**何で俺が！**」と十字架を背負わされたことがきっかけで、イエス様の事を知り、イエス様の十字架と復活を通して、救われ、後にはキリスト者になったのです。シモンは、イエス様の愛を知ってキリスト者になり、あの時、ただ近くにいたという理由でイエス様の十字架を背負わされて、イエス様の後について行ったこと、最初は、腹が立って、なんで自分がとくやしい思いがありました、あの時いやいやながらも、イエス様の十字架を負わされて良かった。疲れたイエス様に代わって十字架を背負わされて本当に良かったと感謝したことだと思うのです。

27節には、「**民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。**」とあります。ここにも、ルカがイエス様に従うというキリスト者、クリスチャンの姿を見ていたのでしょう。28節～29節には、「**イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。人々が、『子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来る。」**」とあります。ここにある「婦人たち」というのは、ガリラヤからイエス様に仕えてきた婦人たちとは別の人々の事です。この婦人たちとは、人が死んだ時など、悲しみを増すために大げさに泣いたりわめいたりという仕事をする婦人たちです。プロの嘆き屋なるものもあったようです。雇って死んだ人の事を嘆き悲しむのです。リビングバイブルには、「**悲しみに打ちひしがれた婦人たち**」とあります。イエス様は、この婦人たちに、「**わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。**」と言われたのです。そして、「**人々が、『子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来る。**」と言われたのは、婦人たちに対する警告でもあるのです。AD70年には、ローマ軍がエルサレムを包囲して制圧した時、500人ほどのユダヤ人が同じ日に、十字架刑に処せられたようです。そのような悲しい事が起こったので、子どものいない人や未婚者たちは、その日に「**幸せな者**」とみなされたのです。普通なら、子どもがいない人や未婚者は、哀れな人として周りから不幸な人たちだとみなされていたのです。結婚して子どもが生まれることは喜ばしい事です。幸せな者と呼ばれるのでしょう。それらのことが、災いになる時が来ると言われるのです。だから、「**『子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来る。**」と言われるのです。リビングバイブルには、「**いいですか……、子供のできない女のほうが、しあわせだ、と思われる日が、すぐにでも、来るのです。**」とあります。

二、私にとってイエス様の十字架にはどんな意味があるのかを考える

そして、30節には、「**そのとき、人々は山に向かっては、『我々の上に崩れ落ちてくれ』**と言い、丘に向かっては、『我々を覆ってくれ』と言いはじめ。」とあり、この言葉は旧約聖書のホセア書10章8節の言葉の引用です。リビングバイブルでは、「**その時、人々は……山に向かって、『私たちの上に倒れて、押しつぶしてくれっ！』**と叫び、丘に

向かって……、『私たちを埋めてくれっ！』と必死で、頼むでしょう……。』とあります。イエス様は、婦人たちに向かつて、「あなた方が本当にしなければならないことは、私の苦しみ（処刑と死）に同情する振りをして嘆き悲しんで涙を流すということではありません。そういう暇があるのならば、神様を無視するという罪に対する神様の怒りや神様の裁きを恐れ、神様を無視するという罪を悔い改めて、神様の赦しを求めるといったことなのです。」ということでしょう。ルカは、民衆や泣き女と言われる婦人たちが、イエス様の十字架の苦しみと死を、まるで他人事のように考えて、表面的に悲しむ表現をしていることに対して、イエス様の裁きの警告を受けているということにこそ意味があることとしてルカは示しているように思うのです。

31節には、「『生の木』さえこうされるのなら、『枯れた木』はいったいどうなるのだろうか。』」とあります。リビングバイブルには、「生木のわたしでさえ、こんな目に会ったら……、あなたがたのような……枯れ木同然の人たちには、いったい……どんなことが……起こるでしょう。』」とあります。罪の恐ろしさについて教えているもので、この罪から逃れるようにと勧めておられます。「生の木のイエス様でさえ、全人類の罪を負うということは本当に苦しいことであるならば、枯れた木である人間が自分の罪を負うことは、それ以上に大変苦しい事なのです。」イエス様の十字架における苦しみの姿は、本来罪人である私たち人間が受けるべき罰の恐ろしさを示すものです。イエス様は、罪人である人間がやがて受けるべき罰をご自身が体験されたのです。もしも、やがて自分の愛する子どもたちが、この罪の罰を受けなければならないのなら、結婚して、子を産み、乳を与えるという母親にはならなかったほうが良かったと思うのが当然なのだということです。「子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ」というわけです。イエス様は、ご自分の十字架の苦しみを通して、その姿を見せて、婦人たちに「あなたも子どもたちも、今の私のように罪の呪いを受けるような私の姿になってはいけません。罪の恐ろしさをしっかり見て、私を通して、私の苦しみの姿を見て、罪から離れて救われるのです。」というイエス様の悲痛な叫びが、訴えがここにあるのではないのでしょうか。民衆や婦人たちは、イエス様を神の子として、神様として認めることができませんでした。イエス様が語られた言葉よりも、自分の信じる聖書観に生きていたのです。イエス様を無視して自分の思い、自己中心的な思いを中心にして歩んでいた民衆や婦人たちは、イエス様の十字架を、十字架の苦しみを軽く見ていたのです。イエス様の十字架は、十字架は自分たちには必要のないものとして馬鹿にしていたのです。現在多くの人々が、同じように自分にはイエス様の十字架は、十字架の苦しみは必要のない事だと判断しているのです。私たちキリスト者、クリスチャンにとって、まだキリスト者ではない方々にとって、イエス様の十字架は、十字架の苦しみはどのような意味があるのでしょうか。ぜひ、考えてみていただきたいのです。イエス様の十字架の意味が自分にとってどのように意味があるのか、イエス様の十字架の苦しみを、死を自分はどうに思っているのかをルカは、今日私たち一人ひとりに問いかけているように思うのです。

三、わたしのために十字架で祈られたイエス様の愛の祈りを受けた者として

32節からは、三本の十字架を取り巻く人々と十字架刑にかけられた人々のそれぞれの

思いが記されています。32節、33節には、イエス様を中心に右と左に犯罪人が十字架刑につけられたことを記しています。神であり救い主であるイエス様が、普通に卑しい二人の犯罪人と同じように、十字架刑にかけられるということは、イエス様ご自身を辱めることでした。また、イエス様が十字架刑にされるということは、祭司長や議員たちのイエス様を十字架刑にするという行為が正義として示されています。34節を見ると「〔そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。〕」人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。」とあります。聖書を見ると十字架の上で発せられたイエス様の言葉が7つあると言われていますが、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」というのは、最初の言葉です。イエス様は35節から39節にあるご自分を卑しめたり、攻撃する議員たちのため、ローマの兵士たちのため、それと35節にある「民衆は立って見つめていた。」とあります。リビングバイブルには、「群衆はそばで、おもしろそうにながめています。」とあり、イエス様に失望していた民衆たちのため、そして、イエス様と一緒に十字架刑につけられた犯罪人のために、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」とまず祈られたのです。彼らは、「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」とイエス様を責め続けたのです。「もし神からのメシアで、選ばれた者なら」「お前がユダヤ人の王なら」「お前はメシアではないか。」という問いは、イエス様に対して、「メシアで選ばれた者ではない。」「ユダヤ人の王ではない。」「神からのメシアではない」とイエス様が自分たちを救うことのできないただの犯罪人だと決めつけてイエス様を否定したのです。イエス様の十字架を敗北のしるしと見たのです。現代も、イエス様の悲惨な十字架の姿に敗北だという人も多くいます。しかし、私たちの罪の身代わりに罪のない正しいイエス様が十字架でさばかれ、苦しみ、私たちのために祈られたイエス様の姿は敗北ではなく、愛なのです。イエス様の十字架の姿、十字架上での祈りを通して私たちが愛されていることを感じます。

40節、41節を見ると、「すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。）」とあります。イエス様の周りのほとんどの人々が、イエス様をあざ笑い、馬鹿にし、救い主を否定する中、たった一人イエス様に対して違う考え、思いを持っていたのです。同じ十字架刑についている犯罪人に対して、リビングバイブルの訳では、「しかしもう一人は、それをたしなめました。「この期に及んで、まだ神様を恐れぬのかっ！おれたちゃあ悪事を働いたんだから、殺されて当然さ。だがよ、このお方はどうだ。悪いことなんぞ、これっぽっちもしちゃおられないんだぜ。）」と誰一人自分を見つめる人のいない中で、「我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。」と自分の罪を認め、「しかし、この方は何も悪いことをしていない。」とイエス様には罪がないということ、つまり神様であることを正直に認めたのです。そして、42節、「そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」とイエス様によりすがったのです。聖書

には、「主の名を呼び求める者はだれでも救われる。」(ローマ 10:13)とあります。犯罪者の男でもイエス様に呼び求めたのです。すると43節には、「するとイエスは、「はっきり言うておくれが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。」とあります。この犯罪人は死の直前にイエス様から素晴らしい救いを頂いたのです。人生の最後の最後に悔い改めて救われて何の意味があるのだろうかと思われる方々がおられるのかも知れません。「はっきり言うておくれが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」というイエス様の約束は、この世の人生において私たちが自分の罪を正直に認めて、その罪の身代わりにイエス様が十字架について裁かれ、尊い血を流し、命をささげて下さった、死んで下さったということを告白するということが、決定的に重要な事柄であるということなのです。私たちが、たとえどのようなみじめな状況にあっても、罪深い存在でも、神様からいかに遠くに離れていたとしても、そのような事柄に無関係に、イエス様は確かに私たちに救いを与えることができるということなのです。イエス様から裁きを言われた民衆や泣き女、婦人たちも、議員も、ローマの兵士も、犯罪人でさえも、人生の最後であっても自分の罪を悔い改めて、イエス様を救い主と信じるならば誰でも救われるのです。十字架の犯罪人のように、「イエス様。御国に入られる時、どうぞ、私を思い出してください。」とイエス様の名を呼ぶ者、神様の名を呼ぶ者は、誰であっても救われるのです。私もあなたもイエス様の十字架と復活を通して、罪が赦され、義とされ、死んでも生きる命、復活の命、永遠の命を与えて下さるのです。そのことを素直に信じたいのです。イエス様は、私たちの人生の最後の瞬間まで、神様の恵みは私たち一人ひとりに臨んでいて、忍耐を持って待ち続けていて下さる愛のお方なのです。しかし、早い方がいいと思うのです。

Ⅲ 結論部

キネレ人シモンは、強制的に十字架を負わされたことを感謝することができました。私達もキリスト者であるがゆえに、無理やり負わされる重荷があるうでしょう。しかし、その重荷を負わされたことを今感謝できなくても、感謝できる日が必ず来るのです。また、イエス様の十字架を自分と関係ないことと否定し、メシアを否定する者であっても、イエス様は信じる者のためではなく、信じない者、否定する者のためにも救われることを願い祈って下さるのです。日本の社会においては、キリスト者は1%未満だと言われます。99%以上に人々が、イエス様の十字架を気にせず、自分との関係も考えず、イエス様を救い主、メシアであることを否定します。私達がキリスト者であることも馬鹿にしたり、何か特別なものを見るかのように、変な顔もされます。そのような日本の中で、十字架の犯罪人のように、周りがどんなにイエス様を否定しようと、キリスト者であることを馬鹿にしようと、「この期に及んで、まだ神様を恐れなかったか！おれたちやあ悪事を働いたんだから、殺されて当然さ。だがよ、このお方はどうだ。悪いことなんぞ、これっぽっちもしちゃおられないんだぜ。」と自分の信じることに自信を持ち、正直なキリスト者としての歩みをさせていただきたいのです。私達の信仰の歩みには重荷があります。しかし、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」と言って下さり、私達のために祈りをしていて下さるのです。そのイエス様に信頼して、全ての重荷をお委ねしてイエス様と共にこの週も歩んでまいりましょう。